

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

ベトナムにおけるタイ語表記

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2011-03-11 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 樫永, 真佐夫 メールアドレス: 所属:
URL	http://hdl.handle.net/10502/00008974

ベトナムにおけるターイ語表記

檀永真佐夫

中国、ラオスと国境を接するベトナム西北地方には、ターイ (T'ai) という公式名をもつ民族が一二〇万人以上居住している。タイ語系言語集団であるターイは、言語、習慣の点から主に白タイと黒タイと自称する地方集団に分けられる。どちらも盆地での灌漑水稲耕作を主生業とし、フランス植民地期まで、首領を頂点とする階層社会を築きあげ、周辺異民族にもその政治的影響力を及ぼしていた。仏教を受容していかないにもかかわらず、東南アジアの他地域



地図1

では上座仏教典を記すために用いられている古クメール系の文字を継承してきたことで、特異なタイ語系言語集団として東南アジア研究者のあいだでよく知られている。

筆者は一九九七年にターイ(黒タイ)の村落で調査を始めてまもなく、彼らの固有文字を覚えるのが言語を習得するのに便利だと思い、村の古老から文字を習いはじめた。その一方で、「ターイ文字の読み書きが日常生活に役立つから学習した」と言う村人を筆者は知らない。この文字は、歌を覚えるため、儀礼を執行

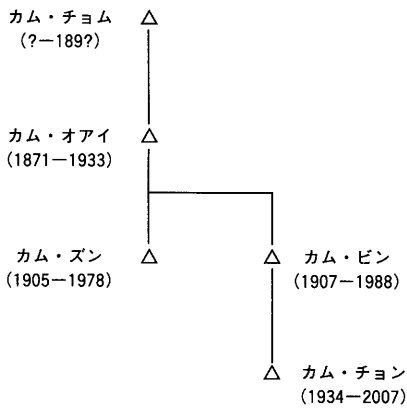


図1 カム家略系図

するためなど、特化された目的のために学習されてきた。つまり、ある言語を記述する文字があっても、人々が日常生活でその文字を積極的に用いるとは限らないのである。このことを、タイ社会における文字使用の状況は明確に示している。実際、タイの人々のあいだでは、過去五〇年の間に、行政も関与した固有文字の普及がくり返し試みられてきた。にもかかわらず、タイ文字が読める人は五パーセントにも満たず、しかもそのほとんどが六〇歳以上の人であり、継承者不足を憂える現地知識人たちの声やむことはない。本稿では、二〇世紀以降のタイ社会の文字文化に焦点を当て、固有文字の普及の条件を考察してみたい。

本稿は、ベトナムにおけるタイ研究の第一人者である民族学者カム・チョン（一九三四―二〇〇七年）の生涯を軸としている。カム・チョンは、卓越したタイ古文書読解力がいかなく発揮して一九六〇年代からベトナム語で民族誌を記述してきた。のみならず、民族自治区期（一九五五―七五年）、一元的社会主義国家建設の時代（一九七六―八六年）、市場経済化の時代（一九八七―現在）という国家の政策路線の激変に応じて民族政策が大きく揺さぶられるなかで、一貫してタイの言語・文字教育の中枢にかかわってきた。そこで、彼の文字文化との関わり方に注目しながら、二〇世紀のタイの文字文化の概略を描くことにしたのである。

1 フランス植民地期（一九世紀末―一九三四年）

カム・チョンは、一九三四年にムオン・ムアツ（現ソンラー省マイソン県）を統治するタイ首領カム・ゾン（一九〇五―七八年）の弟カム・ビン（一九〇七―八八年）の長男として生まれた。仏領期にムオン・ムアツ首領として知州という最高位の地方行政官に任じられていた祖父カム・オイ（一八七一―一九三三年）が逝去した翌年である（図1、写真



写真1 カム家の肖像。左上がカム・オアイ、中央がカム・ズン（2004年3月5日、ソンラー市内カム・ズンの息子カム・ケオ宅にて）。



写真2 ムアン・ムアツの廟址の石柱。この石柱の場合、右にタイ文字「*๙๙๙๙ ๙๙๙๙ ๙๙๙๙*」、左に漢字「天官賜福」の刻文が見える（2007年9月11日、マイソンにて）。

1)。カム・オアイはフランス語も解したが、とりわけタイ文字による詩文の創作に秀でたことで知られ、二〇世紀初頭に著した『クアム・ソン・コン（訓誥）』の写本は各地に流布した。

まず、カム・チョン生誕以前のタイ社会における文字文化の状況を述べておこう。

フランス植民地支配が始まる一九世紀末まで、ベトナム西北地方の支配集団であったタイはおもに漢字とタイ文字を用いていた。ベトナム阮朝の明命帝期には、いわゆる「改土帰流」政策が実施され（一八三三―三九年）、王朝の政治的マジョリティであるキン族の居住圏外の辺境へ中央から流官を派遣するとともに、異民族子弟による漢字学習を奨励し、彼らに「漢風」の習得と科挙受験の道を保証した。一方、タイの各首領にとっても、ベトナム、雲南、

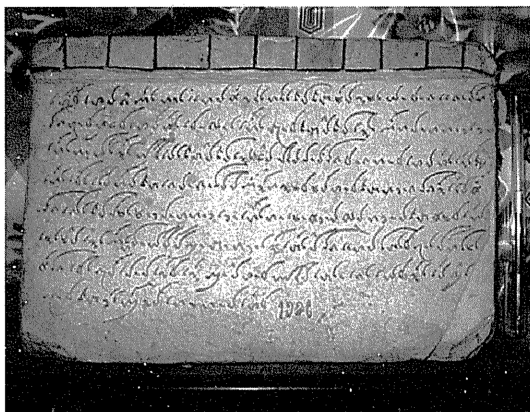


写真3 タイ（黒タイ）文字による年代記の手書き写本。ジンチョウゲ科の植物が作った紙による21×31cmの線装本。アラビア数字による「1926」というコロフォンは、写本した年を示すのであろう（1997年9月5日、ディエンビエン省トゥアンザオ県のタイ村落にて）。

ラオスへの多重帰属関係を維持するために、漢文文書を作成し解読する能力が高い役職者が外交上不可欠で、そのために漢族を雇うこともあった。カム・チョンの出身地ムオン・ムアツでは、彼の曾祖父でもある首領カム・チョム自身も、紅河デルタにある興化（現フートー省）で漢字漢文を八年学んでいる。たとえばムオン・ムアツの廟址に立つ石柱の一つには、アラビア数字による西暦年号を示す「1903」の下に、右にベトナム阮朝年号と西暦年が漢字で、中央に西暦年号がタイ文字（黒タイ文字）で、左に清朝年号が漢字で刻まれている。このように、多種の文字が混淆した刻文は、二〇世紀初頭のタイ首領が多重に帰属し、かつ政治的に諸文字を使い分けていたことを立証している（写真2）。

現在では西北地方で漢族あまり見かけないが、中越紛争が起こった一九七九年まで、漢族が商業のために西北地方を頻繁に行き来し、ディエンビエン、ライチャウ、ソンラー、トゥアンチャウ、ギアロなどの盆地中央の市場付近にも多数居住していた。さらにモン（苗）、ザオ（瑶）の他、カダイ語系やモン・クメール語系やチベット・ビルマ語系の諸言語を話す人々が集まる市場では、中国語も使用されていたのである。しかし、タイの中で漢文の読み書きに精通していた者は、仏領期以前でさえ行政役職者と商人の中でもごく一部に限られていた（櫻永 二〇〇七：一六一―一七）。

タイ文字は漢字に比べると、タイの人々のあいだでもっと広く読み書きされていた。タイは、歌謡、呪術書、年代記、慣習法などに分類できるさまざまな内容の文書類を数多く継承してきた。現在、ソンラー省人民委員会所管の文書館に保管されている手書き写本の数だけで一五〇〇に近く、現在でも多くの村で一冊くらいはタイ文字によ

る植民地期以前の手書き写本が見つかる。しかし、タイ文字による文書を読み書きする人は、行政と宗教を司る役職者と、民間の宗教的職能者の一部に限られていた(写真3)。

タイ文字の存在は、インドシナ北部をフランスの探検隊が訪れた一八七〇年代以来、広く知られるようになった。一八九五年には、ディゲがハノイでタイ(黒タイ)語辞書を出版し、タイ文字を紹介するとともに、黒タイ語のローマ字表記をも試みている(Diguet 1895)。その後一九一〇年代から一九三〇年頃にかけて、植民地支配下の西北地方で、ハノイからディエンビエンへの国道の敷設をはじめとするインフラストラクチャーの整備が進み、行政制度や司法制度も確立した。この時期に初等教育も普及したが、公教育で用いられた文字は、フランス語とクオックグー(ローマ字表記ベトナム語)であり、タイ文字ではなかった。一方で、各地のタイ語をクオックグーに倣ってローマ字表記し、正書法を確立する試みも進んではいたが、これが公教育で用いられるのは第一次インドシナ戦争期(一九四六―五四年)まで待たなくてはならない。西北地方にはタイ語を解さない人々も人口の二割以上いたし、あくまで現地語ローマ字表記はフランス語教育のための補助的手段にすぎなかった。

二〇世紀初頭生まれのカム・ズン、カム・ビンの二兄弟(カム・チョンの伯父と父)は、幼少からタイ文字の読み書きを身につけ、ハノイの小学校に通ってフランス語とベトナム語(クオックグーと漢字)を学習した。もちろんこうした経歴は、在地首領の子弟として将来の政治的活動が期待された生活環境ゆえであり、一九四〇年以前に西北地方で、いずれかの文字の読み書きができた者は一割未満であったといわれている。

2 フランス植民地期(一九三四―五三年)

カム・オアイの政治家としての側面を受け継いだのがカム・ズンであるとすれば、文化人としての側面を受け継いだのがカム・ビンであった。カム・チョンは、幼い頃より父カム・ビンから、時には短い竹の棒で叩かれながら、歌や年代記などを記したタイ文書の素読を習った。また、ジンチョウゲ科の自生植物の樹皮を叩いて紙を作り、猫の

毛と竹から筆も作った。これらは首領の地位の継承権をもつ者として必要な教養であると、カム・ビンは考えたからである。

一九四一年にマイソンから七〇キロ離れたムオン・ムオイ（トゥアンチャウ）にフランスが小学校を開設すると、カム・チョンは親元を離れてそこに通い、フランス語とベトナム語（クオックグー使用）を習った。

第二次大戦が終結した一九四五年八月に、インドシナをフランスと共同統治していた日本が敗戦すると、各地の独立運動を指揮したホーチミンが、ベトナム民主共和国樹立をハノイで宣言した。しかし西北地方は、インドシナの宗主権を主張するフランスの侵攻をすぐに受けた。これに対してカム・チョンの伯父や父などマイソンの首領一族は、ベトミン（ベトナム独立同盟会）に従ってフランスに対抗した。戦闘が激化した一九四六年にカム・チョンは故郷を逃れ、芸術小児団に入団して東北地方でベトナム語と音楽や踊りを学び、時には抗仏運動を各地で展開しているベトミン軍を慰安訪問した。

入団当初、 α (d) と ι (l) のような子音の発音を区別できず、キン族（ベトナムの多数派民族）の同級生に嗤われた昔の思い出を、カム・チョンは筆者に語ったことがある。ムオン・ムオイで小学校に通っていた当時からベトナム語は習っていたが、日常生活でベトナム語を使う機会はムオン・ムオイやムオン・ムアツでは少なかったのである。

芸術小児団で四年間学んだあと、一九五〇年、現在の高校に相当する教員養成学校に入学した。中国広西省の南寧に学校ごと疎開した時期以外は、一九五三年に卒業するまでハノイで学んだ。ベトナム民主共和国では公用語はベトナム語、その正書法としてクオックグーが採用されたため、カム・チョンは公教育を通してクオックグーを身につけた。それは、「植民地主義との戦いは無知との戦い」として、識字率の上昇を重大な国家事業に位置づけたベトナムで、急速にクオックグーが普及する時期に符合していた。

しかしフランス支配から解放されたギアロ（ムオン・ロ）に、ベトナム民主共和国による西北地方最初の小学校が設立された一九五三年、教員として赴任したカム・チョンが教えたのは、ベトナム語ではなくタイ語とタイ文字

であった。当時まだフランスの勢力下にあったライチャウを中心にフランスはタイの自治国を発足させ、公教育にローマ字表記白タイ語を導入していた。一方でベトナム民主共和国側も、それぞれの民族語で教育が受けられることを、国内諸民族の平等を実現するための方法として位置づけ、さらには戦勝後の民族自治区制定も約束していた。当然ギアロにおけるタイ文字教育導入は、現地の人々を味方につけて戦況を有利に導くための政策的意図を含んでいたはずである。しかもフランスによるローマ字表記タイ語の正書法確立に対抗して、一九五二年にはベトナム側はタイ文字の統一と正書法確立を始めていた。カム・チョンによると、この文字統一は、ホーチミンが、後に初代西壮族自治区主席に就任したサー・ヴァン・ミンに会食の席で直接命じたのだという。そして一九五三年にはカム・チョン、民族学者カム・クオンを含む五人の委員の共同作業により「統一タイ文字」の正書法がほぼできあがった。

3 民族自治区期（一九五四～七五年）

一九五四年にディエンビエンフーの戦闘に敗北してフランスが完全撤退すると、カム・チョンはソンラーで西北区教育局幹部に就任した。翌一九五五年のディエンビエンフー戦勝一周年にタイ・メオ自治区（後に西北自治区と改称）が発足すると、自治区内の公的機関における民族語と民族文字の使用が公認されたため、彼が言語・文字政策に直接関与することになる。具体的には、タイ文字文献の収集と解説を行うとともに、その正書法の確立と学校教科書の編纂を担当した。とくにムオン・ムオイ（トゥアンチャウ）の最後の首領バック・カム・クイに仕える司祭として、一九四五年まで「くにの祭祀」を取り仕切っていたルオン・ヴァン・イエウが一九五八年に没するまで、カム・チョンはイエウの薫陶を受け、年代記を中心とするかなりの古文書を読んだ。この時期の勉強が彼のタイ文書の素養の礎となっている。

とにかくこの時期には、クオックグーによるベトナム語教育に加えて、先に述べた統一タイ文字が自治区内の学校におけるタイ語教育に導入され、またこの文字を用いて教科書も編纂された。この文字作成には、以下のような

特徴があった。

① ソンラーの黒タイ文字をモデルに、各地の母音符号と子音字の形態を統一した。

② 声調符号を作成し、子音字の下に付加することによって、表記のみから声調が特定できるようにした。

③ 子音字の字体上の区別を明確にし、複数の子音の発音をもつ子音字をなくし、一つの子音字が表現する子音は一つという原則を徹底させた。

④ 分かち書きや句読点、クエスチョンマークなどの記号を導入し、意味把握が容易になるように紙面上のレイアウトを工夫した。

これによって、音声と表記の一对一対応がかなり実現されたが、それは黒タイ語に関してのみであった。黒タイ語と白タイ語を比較すると、概して子音は白タイ語のほうが多い。したがって白タイ語表記には不都合があった。しかも、字体も黒タイ文字にもとづいていたために、白タイの人々の拒否反応が強かった。そこで、一九五八年から一九六一年にかけて、自治区教育局長ロ・ヴァン・ムオイを長とするカム・チョンら七人の委員が改訂を実施することになった。カム・チョンがハノイ師範大学の前身の大学に一九五九年に進学し作業が滞ったためか、改訂に時間がかかっている。一九六〇年にはハノイで年代記『クアム・トー・ムオン』のベトナム語訳を刊行しているし、この時期に民族学者ダン・ギエム・ヴァンの講義を受けたことが後に民族学者として名をなす縁となったので、彼自身の経歴にとっては大事な時期であった。

とにかく、新たな改訂で作られたのが「改訂タイ文字」であり、改訂の要点は次のとおりであった。

⑤ 白タイ文字から新しく子音字を四つ加えた。

⑥ 中国雲南省シブソンパンナーのタイ族の書体統一に倣って、声調符号を子音字の下に付す方式をやめ、語末に

別の符号を付す方式に改めた。

⑦ 従来、子音字の下や上に付していた母音符号を子音字と同じ横列に持ってきた。これにともない、いくつかの母音符号の形を変えた。

⑧ 語末の末子音がkのときに二通りの読み方が可能であった問題点を改善した(樞永 二〇〇〇)。

改訂ターイ文字は一九六二年から採用されたが、この文字改訂の主眼は、音声と表記の一对一対応だけにあったのではない。母音符号や声調符号を付す位置を変え、すべての文字を横一列に配列したのは、当時の複製技術のレベルに対応する必要からであった。一九五〇年代と異なり、ガリ版印刷から活字印刷への転換が始まりつつあった。当時、活字印刷するには、すべての文字と記号が横一列に配列されていないと困難だったのである。しかし、ベトナム戦争中の一九六九年には、民族自治区内の民族文字の公的使用が、中央からの指示で事実上廃止されてしまったので、

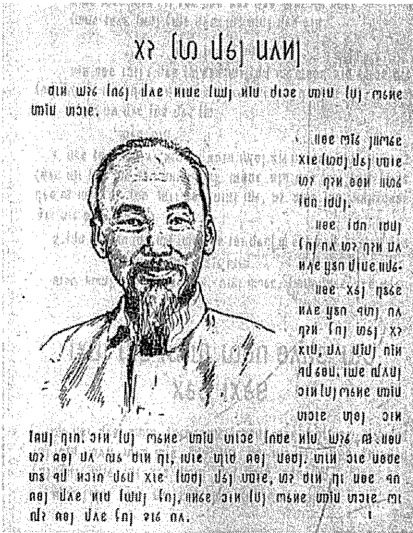


写真4 改訂ターイ文字で活字印刷された自治区時代の1968年教科書(13×19cm)。教科書冒頭にはホーチミン主席に対する賞賛が綴られている。(So giao duc Khi tu chi Tay Bac (bien soan), *Ep doc chinh ta: Hong nung*, Tay Bac Xuat ban, 1968より)

改訂ターイ文字ではほとんど活字印刷されることなく、そうした印刷物を筆者も当時の教科書以外に目にしたことがない(写真4)。

ターイ文字教育が公教育で実施されたのは一九六九年までのわずか一五年であったし、当時の就学率は就学年齢児童の二〇%くらいかと想定される。しかも、改訂ターイ文字を学んだところで、読むものはほとんどなく娯楽の幅も広がらなかったから、ターイ文字教育の導入自体がこの文字の継承者の増加にどの程度貢献したかは怪しい。現在でもほとん

どの村に数人程度読み書きできる人がいるが、その多くは古い統一文字を読めても、改訂タイ文字を読むのには苦勞する。しかも、だいたい六〇歳以上と高齢だが、もともと歌を覚えるために読み方を覚えたのであって、自治区時代に学校で習ったのではないという人のほうが多いのである。彼らにとってタイ文字は歌詞を思い出すのに補助的に役立つ道具でしかなく、日常的にはクオックグー・ベトナム語を読み、必要なことはクオックグーで書きつけている。

一九六五年以降タイ文字教育制度が形をなしてくると、カム・チョンの仕事の重点は、次第に文化調査に移っていく。西北自治区内の歴史研究班と民族研究班に所属し、父カム・ビンと古文書の収集と解読を行うほか、中央からの民族学者たちの通訳や案内役も務めた。また自らもノートとペンだけを携え、ある時は虎狼が潜む森に分け入り、ミズチが棲むという川を渡り、多少の誇張はあるにせよ、西北地方中の村を訪ねたという。アメリカ軍の空襲にさらされたがらの調査であった。

4 一元的社会主義国家建設の時代（一九七六―八六年）

一九七五年にベトナム戦争が終結し、翌年にベトナム社会主義共和国が成立すると、「民族ごとに社会主義の実現を追求する段階は終わり、国民が一体となって社会主義国家を建設する新しい段階にはいった」という党の見解にもとづき、自治区は廃止された。新しい国家建設のために、文化的に均質なベトナム国民として、少数民族もキン族に同化することがより強く求められた。こうしたなかで、全国レベルで独自の文化的慣習が封建的な旧習として批判され、儀礼が簡略化されたり、習慣が廃止されたりした。また、タイの占いや祈禱書は迷信異端の書として、また年代記などは封建主義的な文書として批判されたため、批判をおそれる人はタイ文書そのものを廃棄した。

カム・チョンは一九七六年一月一日付で、ハノイにある民族学院に助手として招かれた。その後、旺盛な執筆意欲を發揮して、『タイ歴史社会資料』（ダン・ギェム・ヴァン主編、一九七七年）、『西北ベトナムのタイ』（カム・チョン

著、一九七八年）をはじめとする民族誌を次々と発表した。社会進化論的視点に基づく封建社会研究としてタイ社会の歴史を記述したものであるが、独自の調査と知識にもとづいた細部の記述がデータとして貴重である。

この時期、もちろんタイ文字での出版はできなかった。現地語はすべてベトナム語に訳され、現地語を引用する場合でも、すべてローマ字表記が用いられた。先述のとおりインドシナ戦争期に、フランス側が白タイ語のローマ字正書法を作りあげていたが、これが用いられたわけではない。各執筆者によって表記はバラバラだったのである。これに対して一九八〇年に言語学院がローマ字タイ語表記の統一を実施し、一九八一年には西北地方各省の人民委員会もローマ字タイ語正書法としてこれを承認したのである。しかし現在にいたるまでその正書法を採用している出版物はほとんどなく、研究者でさえその表記法を無視しているのが実情である。

5 市場経済化の時代（一九八六～現在）

カム・チョンの著作は一九八〇年前後から日本やフランスでも紹介され、おもに東南アジアの前近代的国家論に関心をもつ人類学者や歴史学者のあいだで知られるようになってきた。一九八六年に国際的な孤立と深刻な経済問題を抱えていたベトナム社会主義共和国が内政と外交上の行き詰まりを打開するために、従来の社会主義路線を修正し、経済の市場原理を導入するとともに、政治や文化における諸制限の撤廃が始まった。このドイモイ政策の展開を背景として、カム・チョンと西側諸国の研究者との実質的な研究交流も実現した。

これによってベトナムにおけるタイ研究は新局面を迎えた。カム・チョンとカム・クオンらは、東南アジアにおけるタイ語系言語集団の歴史と文化と社会に関する国際的な研究交流の隆盛に刺激され、一九九五年にベトナムにおけるタイ語系諸民族を研究する学際的な「ベトナム・タイ学プログラム」を発足させたのである。このプログラムは三、四年に一度の研究大会の開催と論文集の刊行に加えて、各地の郷土誌家と専門の研究者との間を取りもつ役割を果たした。

このプログラムに参加している人の多くが在野の研究者であることは、タイ文字保存の点からも意義が大きい。市場経済化以降、地域や民族の文化の保護の重要性を政府は声高に謳うようになった。それに呼応するように一九九〇年前後には、タイ文字で歌謡、年代記、系譜などを書き記して残そうとする人が、西北地方各地に現れはじめていた。プログラムをとおして彼らが互いに連繫しあい、タイ文字を自分たちの文化として強く認識しあい、それを維持し、継承していく活動を活発化させたからである。さらに「ベトナム・タイ学プログラム」の働きかけで、政府、地方自治体、ユネスコの支援を取りつけ、タイ文字教育は一部地域で導入されはじめた。実用化はしていないがタイ文字のコンピュータフォントさえすでにベトナムで作られている。

興味深いことに、プログラムに参加している在野の研究者には、自治区時代にタイ文字を学校で学んだ人も多い。その点で、自治区時代のタイ文字教育と現在のタイ文字保存運動はつながっている。しかしカム・チョンらが現在の教育現場を視察してみると、自治区時代の努力で音声を表記の一致が実現した字体は用いられず、地方ごとに異なる字体が用いられていた。教材も手書きのものコピー印刷である。しかも自治区時代の教育を受けた人々でさえ、改訂タイ文字の使用を好まない。これを学んでも読むものがないから無駄だといっているのである。実際、テキストを介した地域間の交流はクオックグーで行われていて、地域ごとにタイ文字の字体が異なっていたとしても不便を感じることはない。さらに、今の就学生たちはというと、タイ文字学習にそれほど関心がないのが実情である。今や、ことに四〇歳までの人たちのあいだでは、ベトナム語とタイ語のバイリンガルがほぼ完全に実現している。そこで日常生活で何か書き記す必要がある場合、たとえその場の会話がタイ語であったとしても、ベトナム語に訳しながらクオックグーで書くのがふつうである。さらにタイの歌詞などを覚えるためなど、タイ語で綴る必要がある場合でも、ふつうはローマ字表記される。タイ文字は、知っていたとしてもめったに用いられない。

二〇〇七年にカム・チョンから聞いたところによると、地方ごとのタイ文字教育者のあいだでは、改訂タイ文字が書体の一つとして存在することは教えるが、教育現場でこの書体を優先的に用いなくてもよいということで合意

表1 タイ語表記をめぐる年表（櫻永 二〇〇七：二〇より、一部修正）

年	歴史事項	タイ文字改訂	ローマ字表記
一八九五	<p>西北地方に仏が学校設立（仏語、クオックグー教育）</p>	<p>ディゲが黒タイ文字を紹介し、ローマ字表記化した最初の出版物を刊行 カム・オアイによるタイ文字字体改訂 シルヴェストルが北部白タイ文字について報告</p>	<p>ドウジョルジュエによる南部白タイ語クオックグー表記</p>
一九一七			
一九一八	<p>仏がソンラーに小学六年までの学校設立</p>	<p>ミノが北部白タイ文字について報告、北部白タイ語をクオックグー表記</p>	<p>ロベールによる南部白タイ語クオックグー表記</p>
一九二一	<p>仏がトゥアンチャウに小学六年までの学校設立</p>	<p>ベトミン指導下でタイ文字の改訂と書体の統一が行われ、「統一タイ文字」誕生</p>	<p>仏によるクオックグー表記タイ語（北部白タイ語）教育開始</p>
一九四〇	<p>八月革命により、ベトナム民主共和国成立 仏が西北地方を再占領</p>		
一九四一	<p>ディエンビエン解放、西北地方の仏領期終了</p>	<p>タイ文字教育と教科書編纂開始 「改訂タイ文字」が教育省で承認 自治区内でのタイ文字教育延期</p>	<p>言語学院による「統一ローマ字表記」完成 西北地方三省が「統一ローマ字表記」受認</p>
一九四二	<p>西北地方に民族自治区設置</p>		
一九四五	<p>南北ベトナム統一を機に自治区廃止</p>	<p>タイ文字教育、一部で試験的再開 コンピュータ用タイ文字フォント開発</p>	
一九六一	<p>ベトナム社会主義共和国成立</p>		
一九七五	<p>ドイモイ採択</p>		
一九八〇			
一九八六			
一九八二			
一九九二			
一九九九			

されたという。このことは、表記と発音の一对一对応が可能なこの合理的書体の普及に失敗したことを意味している。いっただい、なぜ改訂タイ文字は普及しなかったのであろうか。

植民地期にさかのぼって考えると、タイ文字を読み書きできた人は一部の行政役職者と宗教的職能者にほぼ限られていた。読み書きの目的も、儀礼の執行、法的規範の確認、歌謡の暗記などに特化されていた。その時代、タイ文字は新しい内容の文書を生産するためというよりも既存の文書を再生産するため、せいぜい口頭で人々のあいだに広く記憶されている歌や語りを備忘のために書きつけることを目的として書き記されてきた。植民地期まではタイ文字による読み書きは、特定の職能者による特定の専門活動に限られていたのである。自治区時代になると、タイ文字は、地方ごとの異体が統一され、音声と表記の一对一对応と紙面レイアウトの工夫も実現された。この改変は、タイ文字を特定の職能者からも特定の専門活動からも引き離し、人々がタイ文字を広く日常の用件のために用い始めることを目的としていた。しかし当時の就学率の低さ、クオックグーの普及、教育期間の短さ、印刷技術の遅れといった要因を背景に、タイ語文書量の増大にはつながらず、タイ文字の日常的使用は普及しなかった。これを覚えて使用できても、就学、就職、娯楽などのチャンスが広がるわけではなく、読み書きに熟達するための労働投下に見合うだけの見返りを、個人が期待できなかったからである。タイ文字は、創作したり、日常の用件を自分や他人のために書き記すために用いられる文字にはならなかったのである。

一九七〇年代以降は、タイの人々の読み書きは、ますますクオックグーに一元化され、クオックグーが日常の用件のための文字として受容され定着していく。こうした事実を背景に、タイ語を記す場合でさえ、タイ文字よりローマ字表記がむしろ一般化した。現在でも、さまざまなローマ字表記のあり方が併存している状況は変わらない。裏を返せば、ローマ字だろうとタイ文字だろうと、社会生活でタイ語を表記する必要性が低いことにほかならない。この現状からタイ文字の将来について述べれば、日常生活における実用的な文字として普及するのではなく、文化伝統の一つとして位置づけられ細々と継承されていくにとどまるであろう、というのが筆者の予測である。

参考文献

- 櫻永真佐夫 二〇〇〇 「ベトナムにおける黒タイ表記の変遷——少数民族の文字文化」、『ベトナムの社会と文化』二号、一三三—一七八頁、風響社。
- 二〇〇七 『東南アジア年代記の世界——黒タイ族の「クアム・トロー・ムオン」』風響社。
- Diguet, Edouard. 1895. *Étude de la langue Tai*. Hanoi: F.-H. Schneider Imprimeur Editeur.
- Hoang Tran Nghic va Tong Kim An (bien soan). 1990. *Tu dien Thai-Viet*. Ha Noi: NxbKhoa hoc Xa hoi.
- So giao duc Khi tu chi Tay Bac (bien soan). 1968. *Ep doc chanh va: Hong namg*. Khu Tay Bac: Tay Bac Xuat ban.